

解説を附し且つ文書等の讀み本を添へたり。是等史料及び史蹟の範圍は殆ど愛知縣下に限られたるも、これを全國的に視て亦國史教授上重要な價値を有するもの、吾人は同會の將來益續輯して斯界に寄與せられんことを望んで已まざるなり。(名古屋温故會發行、價不明)(以上松野)

◎Central and Local Finance in china

chuan Shi Li 著

本書は Columbia 大學の研究報告書として支那に於ける中央政府地方政府の國家財政の情況及び其の相互關係を研究したるものにして分つて七章をす、第一章には支那に於ける各種財政關係の官署機關の組織を叙し第二章には過去及び現在に於ける支那の政治界の財政的關係を記し第三章にて國民經濟と地方經濟との分離を論じ、第四章にて英獨日米諸國の國民經濟地方經濟の系統を比較研究の立脚地より詳説し、第五章第六章にて著者の見解を述べて支那中央財政と地方財政の機關の政治經濟的整理に當り如何なる根本的方針を立つべきであるかを示し最後

に中央政府外國租借地及び外人居留地相互間の經濟的關係に就きて論述せり。

◎東洋歴史參考圖譜

歴史教授に當り記憶を深刻ならしめ興味を多からしむる方策は一にして足らずと雖も地圖を使用し歴史圖を掲げて其の遺物遺蹟に親炙せしむるに若くものはなし、從來東洋史の教授に當り此の種の缺陷ありしは何人も認むる所なりしも、日本史西洋史と異なり確實なる史蹟遺物の寫眞を獲るに不便なりし爲、未だ東洋古今を網羅せる統一ある此の種圖譜の刊行を見たることなかりき、本圖譜は此の缺陷を充たすべき一の試にして日本空前の業と謂ふを妨げず、一輯二十二葉十五輯を以て一先づ完了する豫定を以て計畫せられ既に第四輯迄の刊行を見る。資料は能ふ限り正確なるものを選びその寫眞また出來得る限り信頼すべく且つ鮮明なるものを探り、史蹟の眞疑確かならざるも事著名にして談資話柄となすに足るものは之を探り、資を西人の紀行に仰ぎて肅慎靺鞨、天山葱嶺、

鳴沙龍堆赤谷阜園の景觀を紙上に彷彿せしめ樺皮の佛經、木簡の文記、粟特突厥の書契、龜茲于闐の古語、高昌敦煌の壁畫等目今専門家の力を傾注せる方面の史料をも加へんむする計畫なり、既出の四輯の成績を見るに取捨採擇其の宜しきに隨ひ、確に所期の目的に背かざるが如し、每一輯に圖版各個に就きての詳細なる解説あり、教授資料として裨益する所決して多少に非ざらむ、(東京東洋歴史參考圖譜刊行會發行、一輯價四圓)

●中國文化史

顧康伯編

本書は上下二篇より成り簡單ながらも支那の文化を統一的に記述せむと試みたるものなり、著者の言に曰く凡そ歴史の功用は其の文化を考究するに在り、二十四史は歷朝の治亂興亡の迹を記するに過ぎずして文化進退の迹に至りては概ね輕んぜらる。智力實業美術宗教政治の消長は所謂文化史の中核たりと、支那の政治地理風俗宗教軍事經濟學術思想其他一切人生に關係ある事項を打つて一九三三年支那文化史を形成せむとする著者の抱負の概

觀を叙したるもの即ち本書にして、特に注目し値する記載も無く、又甚だ粗笨なるものなりと雖も支那に於ける此種の歴史書編纂の先驅者として意義ありとす。(上卷二百二頁下卷四百五頁、上海泰東圖書局發行、價大洋八角)

●中國交通史

王倬編

支那の交通史に佳良なる書籍の稀なる折柄此の種の試みあるは多とすべし、外國との交通關係につきては専門學者の間に既に權威ある研究の發表せらるゝありて、到底本書の追從し得ざる所なるも、内地交通に至りては未だ纏められたるものなければ、蓋し本書の如きは此の方面の研究の興味を助長する點に於て貢獻する所多かるべし。方向、道里舟車の發明、通信、道路橋梁城郭の築造より起筆し黄河の沿革、河流交通の沿革、秦の馳道、五嶺通道、棧道、秦漢以來の關隘、張騫甘英の通路、漢晋以來印度との交通、隋の運河、宋元の漕運より耶蘇宣教師の交通關係を叙し現今の水運船舶鐵路の沿革、新交通技術の發明を詳述せり、(百五十二頁、商務部書館發行、價大

洋四角五分)〔以上那波〕

● R. R. Getteli, *History of Political Thought*

題目は政治思想であつて政治上の制度ではない、著者は此兩者の別を特に斷つてゐるが、過去を知らんミするには唯「何をなしたか」の外に「如何に考へたか」、「如何に望んだか」を知らねばならぬ、制度は其極めて一部分のみが指示されるに過ぎない、本書は或は實現され或は夢想に終つた政治上の信念及希望の記録であつて政治思想の起原から現代思想の傾向までを論述してゐる。但し、思想ミいふも實は時代なり國土なりの事情智的發展の段階に影響されたる思想であつて純粹思索ではない。著者は古代に於ける一般的な且顯著な特色は宗教、慣習、法律を分化し得なかつた點であるとし政治上の進歩は異なる事項の間に區別を設け各自に其の特有な地位職能を與ふるにあると説きこれを中世及近世に於ける數個の例に依つて立證し更に現代の政治問題は立法の職能は何か、如何なる範圍まで人民の生活方法、個人的習慣に關與し得るか

を決定することに依つて解決せられるとし、最後の數章は社會主義的政治思想新自然觀、國家權力の制限に關する思想を分析し且、其由つて來る所以を詳論してゐる。著者は飽くまで判官の地位を避け、批評は他に譲つてミこまでも史家たるの態度を失はず、數多の學說を客觀的に取り扱つて居つて吾人の觀るミこころではこの種の著作中一頭地を抜くものミ言つていゝ、また各章毎に擧げてゐる參考書目も至極適切ミ思はれる。

● W. C. Meller, *A Knight's Life in the Days of Chivalry 1924.*

章を分つこミ十八、騎士道の起原から其の衰微までを論述してゐる。中世に於ける貴族生活の研究は著者の獨壇場であつて到底他の追隨を許さない、唯、惜むらくは戰時に於ける騎士の生活を敘述するこミ詳にして平和の生活、即ち城内の日常生活殊に騎士階級の宗教的、智的觀念に論及するこミ簡に過ぎる憾みがないこはいへぬ、又僱侶階級、下級社會の生活に至つては勿論本書の目的では